

Accounting for the slowdown in output growth after the Great Recession: A wealth preference approach

ロチェスター大学 稲垣 一真、大阪大学 小野 善、大阪大学 敦賀 貴之

2008年のリーマンショック以降、それまで高い水準を維持してきた先進諸国の経済成長率が鈍化し、各国経済は長期停滞 (Secular stagnation) に陥っていると多くの研究で議論されてきた。本研究では、そのような経済成長率の鈍化を説明する経済成長モデルを構築する。モデルでは、標準的な貨幣的成長モデルに、資産選好と名目賃金の下方硬直性を組み入れる。その結果、経済活動水準が低い段階では生産性成長率と同率に高い率で成長するが、その後、経済活動水準が高まるにつれて、生産性成長率とは独立に内生的に低下し、長期停滞の定常状態に移行する。さらに、この分析を米国データに適用すると、経済成長率の低下に加えて、米国で観察される実質金利やインフレ率の低下をうまく説明できることが分かった。